〔論　文〕

子どもの仲間関係に関する研究動向と展望

A Review of the Research on Children's Peer Relationships

藤　田　　文
Fujita Aya

ABSTRACT

The researches concerning the children's peer relationships were reviewed and discussed in this article. First the model of the individual's social ability and skills and the interactions among children was introduced. Second the fan shaped social skills model was introduced. This social skills model is very useful to examine the development of the regulation of children's peer relation. In this article the regulation of children's peer relationships is focused. Some kinds of rules among children play the important role as a scaffolding of their regulation.Third the researches about the rules among the children were introduced. It is suggested that there is a need to research of children's regulation of their peer relationships in a variety of the game situation. And future work should add the aspect of analyzing the emotional regulation.

Key words: peer relationships, early childhood, rule of the game, emotional regulation

子どもの社会化の過程において，親子関係だけでなく仲間関係が重要な影響を及ぼすと考えられるようになり，子どもの仲間関係が注目されるようになった。また，現代社会では，青年期のいじめやひきこもりなどの対人関係の問題から，仲間との関係における適応的な社会的能力への関心がますます高まっている。本論文では，まず仲間関係研究の重要性と仲間関係研究の視点を提供するモデルを解説する。次に，近年の仲間関係研究を概観した上で，仲間関係研究の今後の課題を考察する。

（1）仲間関係研究の重要性

青年期に現れる対人関係の問題は，幼児期から蓄積された社会的能力と関連があるのではないかという観点で，近年では，仲間との関係調整の長期的な影響に関して縦断的な研究が行われるようになった。前田（2001）では，幼児の仲間との関係における社会的地位の持続性が分析された。その結果，幼児期に社会的地位が低く，あの子は攻撃的な子どもだと仲間から認識されると，その認識が仲間の間に広がり，他の仲間にも避けられるようになり，さらにそういう仲間に対して攻撃的になっていくことが明らかになった。つま

り，幼児期の他者との関係調整の特質は，固定的な風評となり，のちの仲間との関係調整の悪循環を形成することが示されている。

また，より長期にわたる縦断研究では，子ども時代に仲間との関係調整の能力が欠如すると，のちの青年期の社会的不適応のリスクが高まることも示されている（Asendorpf, Denissen, & Aken, 2008）。仲間との関係調整がうまくいかない問題として，いじめの長期的影響を調べた研究も見られる。Ladd et al.（2017）では，５歳から17歳までの子どもの縦断的な研究が行われた。幼児期から高校生までの間，いじめ体験，学校の適応や学業成績，学業に対する自己知覚や達成感などを調査した。その結果，長期間慢性的にいじめを受けた経験がある子どもは，学校適応が悪く，学業に対する自己知覚や達成感が低いことが明らかになった。また，Arseneault et al.（2006）では，幼児期にいじめを受けた経験があると，その後の学校生活への適応が悪いことが示され，Schuwartz et al.（2005）でも，小学３，４年生でいじめを受けた経験があると，後の学業達成が低いことなどが示されている。同様に，Hanish & Guerra（2002）では，幼児期の早期にいじめられていると，その後２年間以上にわたって，仲間から嫌われる可能性が高まることが示されている。特に，このようないじめを受けた経験によって，のちに仲間から拒絶されるという影響は，男児よりも女児に見られている（Khatri et al.,2000）。さらに，Bellmore & Cillessen（2006）では，小学校の中学年から中学生時代においていじめを受けた経験は，２年半にわたって自己の社会的価値を低下させることが示された。

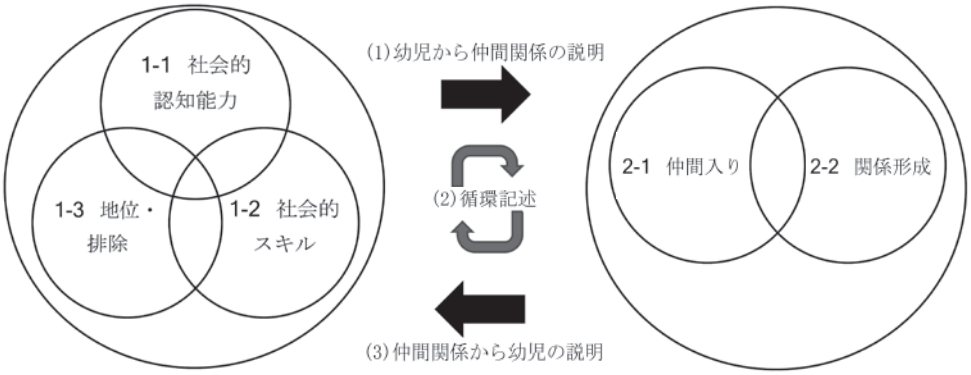
McDougall et al.（2015）は，幼児期や青年期にいじめを受けた経験が，成人になってからも長期間にわたって影響を及ぼすのかどうかに関して，従来の研究をレビューしている。いじめを受けた経験は，学業的な側面，身体的健康の側面，社会的関係性の側面，自己知覚の側面，精神的健康の側面に否定的な影響を及ぼし，特に他の精神的要因と重なると，より長期にわたり大きな影響を及ぼすことが示された。

このようなリスクを軽減し，社会的不適応を予防していくためには，幼児期からの仲間との関係調整の発達の様相について詳細に検討する必要がある。そしてその知見から，社会的発達の促進に早期から取り組むための保育や教育への示唆を得ることが重要であろう。

（２）仲間関係研究の視点を提供するモデル

及川（2016）は，幼児期の仲間関係に関する研究動向を，個体能力論に沿う研究と関係論に沿う研究の２軸によって整理した。この２軸の構成要素と関係性を表したのが図１である。この研究では，個体能力論及び関係論の２軸の関係性から，研究における議論の方向性を３つの方向性に分類している。１つ目が「個体能力論の知見から関係論」を説明しようとするものである。２つ目が，個体能力論と関係論の循環的な関係性について記述しようとするものである。３つ目が，「関係論の知見から個体能力論」を説明しようとするものである。

この研究では，１つ目の個体能力論から関係論の知見を説明しようとした研究が従来では多く行われていて，偏りがみられることが指摘されている。つまり現在は，社会的認知能力，心の理論の獲得，社会的地位の向上，向社会的判断の向上，社会的スキルの獲得といった個体能力によって，仲間との関係を説明しようとしている研究が多く行われている



1．個体能力論による仲間関係研究　　**2．関係論による仲間関係研究**

図１　仲間関係研究における説明・記述の方向性とその偏りの概要（及川, 2016）

状況である。この方向性の背景には，仲間関係を形成することの困難さについて，社会的認知能力やスキルの不足から説明可能という考え方が存在している。従って，幼児が仲間関係をうまく形成できない場合に，個人の認知能力や社会的スキルを向上させるような介入や支援を行うという研究方向になっている。

また，２つ目の方向性を持つ研究は，利根川・無藤（2011）に代表されるように，４歳児クラスの集団の変化を，幼児の社会的能力の発達過程と仲間関係の進展過程を分析視点としてとらえて，仲間関係の構造変化により個人が変わり，個人が変わることで仲間関係の構造が変わるという循環関係を示している。この方向性は，幼児や集団の発達を記述することには適しているが，変化の要因や契機を説明することが困難であると指摘されている。３つ目の方向性を持つ研究は，遊びにおける仲間関係でのいざこざや仲間入り，コミュニケーションスキルや自己制御の出現が，様々な物理的・社会的環境によって影響されることを示している。しかし，幼児期における仲間関係の多様性を記述するにとどまっており，環境要因による仲間関係の変容が，個体能力の発達へどう影響するかを明らかにはしていないと指摘されている。

確かに，１つ目の研究の方向性が，個人の社会的能力の発達を促進させる要因を見出すのには適しているといえる。しかし，個人の能力と社会的場面での行動が必ずしも一致しないことは，常に指摘される課題である。溝川（2011）では，心の理論の理解や複雑な他者の感情理解は一部の社会的能力と相関が見られたものの，仲間関係とは直接的な相関は見られなかった。島・黒岩（2017）でも，共感という個人能力が必ずしも向社会的判断を導くものではないことが示されている。従って，このような個人の認知能力は確かに社会的能力の基盤ではあるが，仲間との関係調整のスキルに直接または全体的に関係しているとは限らないと考えられる。及川（2016）でも，仲間関係の幼児の発達を説明する際には，仲間関係の形成それ自体に発達契機を見出す必要性があること，仲間関係の形成や変容については，幼児の参加する活動の文脈を含みこんで分析する必要性が示唆されている。

つまり，最初から他者と関わることを前提として，関係性の中で調整される点を重視して，個人の能力と社会的仲間関係が含まれた統合的なモデルが必要だと考えられる。他者と関わることを前提として，コミュニケーションを円滑に行うためのスキルを整理したのが藤本・大坊（2007）である。この研究では，定義が多岐にわたる社会性関連のスキルが詳細に分類されて，「スキルの扇」として図２のように統一してまとめられている。

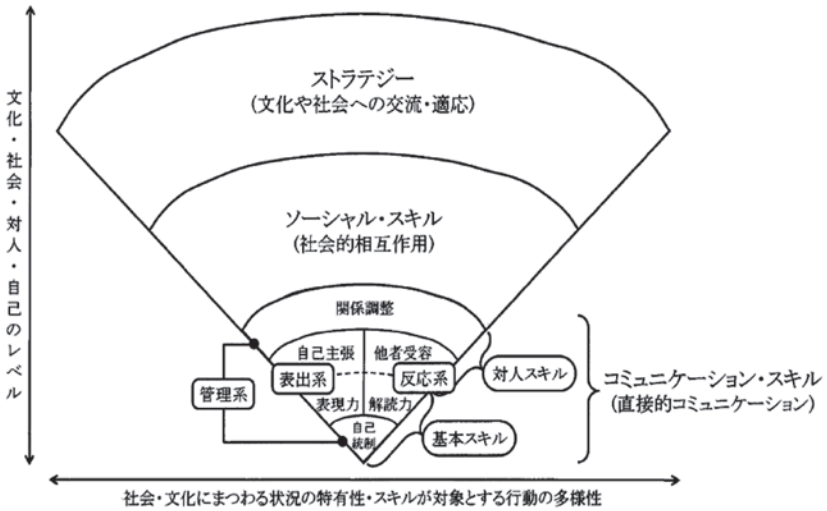


図２　スキルを階層構造として捉えた“スキルの扇”（藤本・大坊，2007）

このモデルでは，まず文化・社会への適応において必要な能力であるストラテジー，対人関係に主眼がおかれた社会性に関わる能力であるソーシャルスキル，言語・非言語による直接的コミュニケーションを適切に行う能力であるコミュニケーション・スキルの３種類を設定した。そしてこれらは，個人の能力から社会適応するためのストラテジーにわたる状況や行動のレベルの違いにより（図２の縦軸），コミュニケーション・スキルを基礎とし，その上位にソーシャルスキル，さらに上位にストラテジーが位置する階層構造に関連づけられている。またこれらのスキルは，そのレベルに応じて，文化や社会に共通する汎用的な能力かそれとも特有の状況に対する具体的な能力かという多様性の違いがある（図２の横軸）としている。

この階層の中で特に，直接的コミュニケーションを円滑に行うために必要な話す・聞くといった文化や社会に共通する能力に焦点を当て，この概念をENDCOREsモデルによって整理している。コミュニケーション・スキル概念から自己統制，表現力，解読力，自己主張，他者受容，関係調整に関する６因子を抽出し，これらを，表現力と自己主張に共通するENCODE，解読力と他者受容に共通するDECODE，自己統制のCONTROL，関係調整のREGULATIONに分類して，それらの頭文字を取りENDCOREsモデルとしている。

このモデルでは，相手に対する直接的な働きかけに関する対人スキルには，自己主張と他者受容と関係調整の３因子があるとされている。また，この中の関係調整とは，円滑な社会的相互作用を行うために，集団内の対人関係及びコミュニケーションに働きかける能

力であると定義されている。関係調整は，自分の意見を躊躇することなく相手に伝える自己主張能力と，相手の立場や考えを配慮する他者受容能力が土台となり形成されている。関係調整は，自己主張と他者受容の能力を土台にしているが，この二つの能力とは区別された因子である。関係調整は，実際の対人関係をコントロールするものであり，親和的な指向性の側面と能力的な側面を持っている。つまり関係調整は，対人関係に対する指向性である「関係重視」，関係を良好な状態に保つ能力である「関係維持」に加え，関係を悪化させる意見対立と感情対立という「葛藤への対処」の３要素から構成されていると考えられている。

藤本・大坊（2007）は，大学生を対象にして研究を行い，このモデルの妥当性を検証した。この研究においては，関係調整の発達的側面には言及していないが，他者と関わることを前提としてコミュニケーションスキルを統合的に示したこのモデルは，子どもの仲間関係の研究視点として適応できると考えられる。中でも，関係調整の３要素である関係重視，関係維持，葛藤への対処は，子どもの遊び場面における仲間関係をとらえる視点として有効である。その関連を図３に示した。

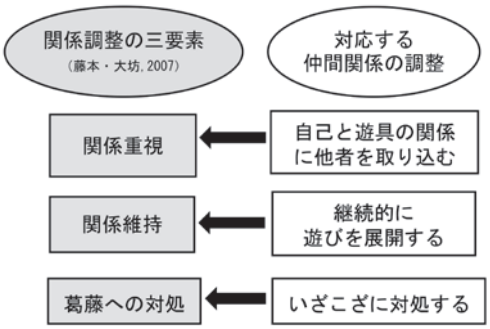


図３　関係調整の三要素と仲間関係の研究視点の関連

幼児の仲間との遊び場面では，他者との関係が未熟な平行遊びから協同遊びへの移行期に，遊びの中に他者を取り込んで遊びを共有し，他者の行動に注意を向けて，他者を配慮しながら継続的・安定的に遊びを展開していくなど，仲間との関係調整の種々の要素が含まれていると考えられる。遊びの中での仲間との関係調整においては，まず，自己と遊具の関係に他者を取り込むことが必要であり，他者と関わることを考える「関係重視」の側面に対応する。また，継続的に遊びを展開し，いざこざが生じた場合は，それに対応していかなければならない。それが，このモデルの「関係維持」と「葛藤への対処」の側面に対応すると考えられる。藤田（2015）では，このモデルをもとにして，子どもの仲間との関係調整の発達を検討している。そして，自己と遊具との関わりの中に他者を取り込み，その関係を維持して，葛藤に対処していく仲間との関係調整は，幼児期，特に４歳児から５歳児において発達することが示された。その中で，子どもたちが産出するルールが大きな役割を果たしていることが示された。従って，次にルールに焦点を当てた仲間関係の研究を概観する。

（３）ルールに焦点を当てた仲間関係の研究

子どもの仲間との関係調整においては，ルールが足場かけの役割を果たしていると考えられる。関係調整における足場かけの発達的出発点は，従来の母子関係の研究で示されている。母親の足場かけが，子どもの関係調整の発達に重要な役割を果たしている。Bakeman & Adamson（1984）とTreverthen & Hubley（1978）は，乳児期の子どもと母親の相互作用を観察し，月齢が進むにつれて，ものに向けられた子どもの注意が社会的文脈の中に組み込まれて，視線がものと他者に交互に移行するような三項関係が見られるようになることを示した。その際に，母親は子どもとの場の共有場面において，子どもが他者に注意を向けて，自己とものと他者の三項関係を考慮できるように，子どもに必要な足場かけを行っているのである。

吉田（2010）も，母子関係の事例の観察から母親の足場かけの様子を示した。母親の足場かけで重要な点は，子どものものへの注意を対人的構造に組み込むように調整していくことである。具体的には，母親は，行動の繰り返しパターンを使用し，子どもが予測可能なルールを産出する。そして共有された記憶システムを維持して，ものと他者の両方に同時に注意する労力を低減してやっているのである。これをきっかけに，２歳前後の子どもは対比的な役割を取ったり相補的な役割を行ったりして，交代性のあるやり取り遊びにふけるようになる。つまり，子どもは遊びの中に他者を取り込んで，する者とされる者の二つの役割を交代で楽しみながら演じる。交代でものを使用したり，交代で役割を演じたりすることによって，それまで未分化であった自己の内部に他者性を認識するようになると考えられている（Wallon, 1952）。また，青木ら（2019）では，小学生の仲間関係おける教師の介入解決方略について検討し，教師のミディエーションが子どもの仲間関係の足場かけとして重要な役割を果たしていることを示した。

子どもは，母親や教師とのこのような足場かけを利用して，自己・もの・他者の三項関係の基本的な構造を認識し，仲間との関係調整を発達させている。しかし，仲間との関係調整の場合，母親や教師のように足場かけをしてくれる人はいない。仲間関係の場合は，対等関係であり，相互の欲求が対立することが多い。従って，仲間関係の中では，おもちゃの取り合いや役割の奪い合い，意見の食い違いなどさまざまないざこざが生じ，多くの葛藤を経験することになる。さらに，相互交渉する中で仲間からの反応は，突発的であったり不規則なものであったりするため，予測不可能なものが多いと考えられる。つまり，仲間関係は，他者と場を共有する困難性が高い。このような仲間との関係調整において足場かけとなるのが，ルールだと考えられる。大人からの足場かけにおいて，大人が子どもに提示する行動のルールが，他者を取り込んで，相互作用を継続させるために重要な役割を果たしているからである。

従って，遊び場面における子どものルールに焦点を当てて検討すれば，「関係重視」や「関係維持」の要素を含む仲間との関係調整の発達を明らかにすることが可能になると考えられる。ルールが産出されれば，それが子どもの関係調整の足場かけとなり，他者を遊びの中に取り込んで（関係重視），遊具を継続的・安定的に共有する（関係維持）ことができるだろう。ルールが仲間との関係調整の足場かけになると仮定して，仲間関係を検討していくことが重要であると考えられる。

幼児期は先に遊具を所有している子どもの権利が認められることが多く，先行所有ルー

ルが強く働いていることが示されている（山本，1991）。いざこざに先立つ１分前に遊具を使用していた者の方が遊具の獲得率が高く，相手の抵抗の出現率が低下することが示された。先行所有ルールはソシオメトリー地位の高低に関係なく適応されることも示された。つまり先行所有ルールは，仲間関係において順位が上の強い者だけに適応されるものではなく，どの子どもにも適応される平等の行動原則に基づいて機能するものである。先行所有ルールの萌芽は，２歳児頃からみられるものであり，このルールが関係調整の足場かけになっていると考えられる。

また，藤田（2007，2015）は交代性ルールに着目した。交代性ルールは，遊具を一時的に他者から奪うということではなく，他者と一緒に遊具を継続的に使用するために産出されるものである。交代性ルールが産出されれば，遊具と他者の両方に同時に注意を向ける労力を低減させるため，子どもは自己と遊具の関係に他者を取り込むことが可能になる。また，遊具を使用する順番が明確になり，自己と他者の行動が予測可能なものになるため，自己と遊具と他者の関係調整が継続的・安定的にできるようになるだろう。

また，交代性ルールでは，他者が遊具を使用して遊びを実行している間，自分は実行しておらず順番を待っていることになる点が重要である。遊具を同時に使用して同時に遊びを実行する同時性ルールでは，自分が遊びを実行している間に他者の様子を見ることはできず，自分と遊具との関係が重視される。それに対して，交代性ルールでは，自分の順番を待っている間，他者の行動に注意を向けて他者をよく見ることが可能になる。他者の行動をよく見ることで，他者への要求のタイミングを見計らったり，比較対象としての他者を意識したりして，他者との関係調整がより発展していくと考えられる。

実際藤田（2007，2015）では，遊び場面における幼児の仲間との関係調整には，基準が明確な交代性ルールの産出が重要だと示されている。魚釣りゲームなどの遊具を交代で使用して遊ぶような場面において，４歳児は不明確な基準で交代していざこざが多く生じるが，５歳児は明確な基準で交代して，いざこざが少ない関係調整ができるようになることが示された。また，同時に他者配慮的なルールの主導ができるように発達することが明らかになった。特に５歳女児で他者を配慮した関係調整の発達が早いことも示された。従って，交代性ルールの産出が，他者を遊びに取り込み関係調整の足場かけとなっていることが示された。

この他にも鬼ごっこを対象に，ルールによる仲間との関係調整の発達を検討したものがある（田中，2005；田中舘，2020；富田，2015）。これらの研究では，鬼ごっこにおける追うオニ役割や逃げるコ役割の関係性の意識やルールの理解における保育者の役割についても検討されている。鬼ごっこは集団での遊びであり，そのルールが集団での関係調整の足場かけの働きを持っていると考えられる。ルール遊びに関する研究は多いとは言えないため，今後は，多様なゲーム場面でのルールの役割を検討する必要がある。

（４）情動の視点を加えた仲間関係研究

及川（2016）や藤本・大坊（2007）のモデルにおいては，仲間関係に影響を与えるスキルや認知能力は含まれているが，情動的側面については位置づけられていない。しかし，子どもの仲間関係においては，直接的な情動表現が多くみられ，情動的なコントロールの側面を要因に入れていく必要がある。

幼児の情動制御と仲間関係については，中澤（2019）で新しい知見が得られている。この研究では，年長幼児を対象に，情動喚起刺激（MISC：Mood Induction Stimulus for Children）視聴時の情動制御と仲間適応との関連が検討された。情動喚起刺激として，喜び，悲しみ，怒り，不安の４つの感情のエピソードがある情動喚起のDVDを使用した。また，情動制御の指標として，幼児に負担が少ないように，顔面体表温度を赤外線サーモグラフTVS-200EXで測定した。仲間関係の指標として一緒に遊びたい友達を尋ね，教師による行動評定も加えた。

MISC視聴時の顔面皮膚温を測定して，仲間関係との関連を検討した。その結果，仲間から一緒に遊びたいと選ばれる子どもは，ネガティブな情動喚起場面で表情表出を抑制し，またネガティブ情動喚起後の感情の鎮静化に優れていること，すなわち情動の制御能力を持つことが示された。また，男児や向社会性の低い幼児は，課題の当初で表情表出が多かった。これは，課題場面に直面した時の緊張感の低さや感情の喚起のされやすさ（制御困難）を示している。一方，向社会的な女児は，最後のポジティブ場面後の安静で表情表出が多かった。これは，ポジティブな出来事を体験した主人公への共感やそれまでの緊張や集中の解消を反映していて，状況に応じた感情の適切な制御能力を示している。男児や向社会性の低い幼児は，感情の制御や鎮静能力が低く，それが日常の他者への行動にも影響していることが示唆された。このように，幼児期の情動制御と仲間関係の適応に関連があることが示された。

また，岩田（2019）では，幼児期の「おもしろい」「楽しい」の感情言及機能を検討した。遊び場面における感情言及が，親密な仲間関係を構築する機能を持っていることが明らかになった。「おもしろい」「楽しい」という言葉が興味や関心の共有，仲間を求める機能，過去の経験の共有の機能を持ち，自他の関係調整や仲間関係の親密度を高めるために重要な役割を果たしていることが示された。

同様に芝崎・芝崎・徳田（2016）では，４歳児クラスを対象として，幼児の仲間関係における感情表出が検討された。その結果，感情表出は，他児とのつながりを求める機能を持ち，仲間関係を広げ，ポジティブな感情表出が向社会的行動とつながることが示された。小川（2020）では，幼児のふざけ行動に関する研究を概観し，ふざけ行動が子どもが相手との笑いや楽しさを共有するための役割を持っていることが示された。つまり，ふざけ行動が社会情動的スキルと関連しており，仲間関係の強化につながっていることが明らかになった。

藤田（2020）では，幼児のいざこざ場面を分析した。その結果，幼児はいざこざの解決のため，説得・謝罪など様々な方略を用いていた。その一方で，方略を感情的に使用して，怒った口調で説得したり，相手の泣いている感情に対処できない様子が示され，方略が必ずしも有効に機能していない場合がみられた。いざこざの解決の言語方略だけでなく，情動コントロールが重要であることが示唆された。また，第三者の介入により相互理解が得られる事例がみられた。情動のコントロールが必要な関係調整には，当事者だけでなくより冷静な第三者の存在が重要な役割を果たすことも示唆された。

これらの研究から，子どもの仲間関係において，情動の果たす役割は大きく，今後の研究では，情動的な側面を含めて仲間との関係調整を検討し，モデルに組み込んでいく必要があると考えられる。

（5）仲間関係研究の今後の展望

本論文では，仲間関係に関するモデルを紹介し，足場かけとしてのルールの重要性と情動の視点を加えた関係調整の重要性を述べた。仲間関係の発達において，確かに個々人の認知的能力が背景にある。それでも，仲間と実際に関わることを前提に，社会的スキルや自己調整をとらえていく必要があると考えられる。その際に，仲間と関わる足場かけとなるルールの機能をとらえることは重要な視点である。多様なルール遊びにおける仲間との関係調整を明らかにすることで，保育・教育場面での環境設定に示唆を与える研究ができると考えられる。

また近年，情動が仲間関係に与える影響を示した研究が増加してきている。仲間関係を調整するスキルやルールを使用したとしても，泣いてばかりいる仲間や怒りの表情を浮かべた仲間，激しい口調などが関係調整を妨げる場合が特に幼児の場合は多く観察される。従って，今後は，ルールの調整とポジティブな情動やネガティブな情動の側面を含めた仲間関係の研究が必要になってくるだろう。

【引用文献】

青木　多寿子・山崎　彩加・奥村　弥生・三宅　幹子・木村　正信（2019）．小学校における児童のいざこざの分類と教師の介入解決方略としてのミディエーションの有効性　岡山大学教師教育開発センター紀要, 9, 33-46.

Arseneault,L., Walch,E., Trzesniewski,K., Newcombe,R., Caspi,A., & Moffitt,T.E.（2006）. Bullying victimization uniquely contributes to adjustment problems in young children.:A nationally representative cohort study. *Prediatrics*, 118, 130-138. http://dx.doi.org/10.1542/peds.2005-2388.

Asendorpf, J. B., Denissen, J. J., & Aken, M. A. G.（2008）. Inhibited and aggressive preschool children at 23 years of age: Personality and social transitions into adulthood. *Developmental Psychology*, 44, 997-1011.

Bakeman, R., & Adamson, L. B.（1984）. Coordinating attention to people and objects in mother-infant and peer-infant interaction. *Child Development*, 55, 1278-1289.

Bellmore,A.d., & Cillessen,A.H.N.（2006）. Reciprocal influences of victimization, perceived social preference,and self-concept in adolescence. *Self and Identity*, 5, 209-229. http//dx.doi.org/10.1080/15298860600636647.

藤本　学・大坊　郁夫（2007）．コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み　パーソナリティ研究, 15(3), 347-361.

藤田　文（2007）．魚釣りゲーム場面における幼児の交互交代行動－交互交代の基準と主導者に着目して－　発達心理学研究, 18, 227-235.

藤田　文（2015）．遊び場面における幼児の仲間との関係調整の発達：交代性ルールの産出とその主導者を中心に　風間書房

藤田　文（2020）．いざこざ場面における幼児の仲間との関係調整　九州心理学会第81回大会発表論文集, 21.

Hanish,L.D., & Guerra,N.G.（2002）. A longitudinal analysis of patterns of adjustment following peer victimization. *Development and Psychopathology*, 50, 2426-24436. http://dx.doi.org/10.1017/S0954579402001049.

岩田　美保（2019）．幼児期の親密な仲間間の「おもしろい」・「楽しい」の感情言及機能：その関係構築に果たす役割に着目した発達的検討　発達心理学研究, 30, 44-56.

Khatri,P., Kupersmidt,J.B., & Patterson,C.（2000）. Aggression and peer victimization as predictors of self-reported behavioural and emotional adjustment. *Aggressive Behavior*, 26, 345-358. http://

dx.doi.org/10.1002/1098-2337.

Ladd,G.W., Ettekal.I., & Ladd,B.K. (2017). Peer victimization trajectories from kindergarten through high school: Differential pathway for children's school engagement. *Journal of Educational Psychology*, **109**, 6, 826-841.

前田健一 (2001). 子どもの仲間関係における社会的地位の持続性　北大路書房

McDougall.P. & Vaillancourt.T. (2015). Long-term adult outcomes of peer victimization in childhood and adolescence. *American Psychologist*, **70**, 4, 300-310.

溝川　藍 (2011). 5,6歳児における誤信念及び隠された感情の理解と園での社会的相互作用の関連　発達心理学研究, **22**, 168-178.

中澤　潤 (2019). 幼児の情動制御と仲間関係　植草学園短期大学紀要, **20**, 1-9.

小川　絢子 (2020). 乳幼児期のふざけ行動に関する研究の概観と今後の課題　名古屋短期大学研究紀要, **58**, 115-120.

及川　智博 (2016). 幼児期における仲間関係に関する研究の動向：個体能力論と関係論の循環の先へ　北海道大学大学院教育学研究院紀要, **126**, 75-99.

Schwartz,D., Gorman,A.H., Nakamoto,J., & Tpblin,R.L. (2005). Victimization in the peer group and children's academic functioning. *Journal of Educational Psychology*, **97**, 425-435. http://dx.doi.org/10.1037//0022-0663.97.3.425.

芝﨑　美和・芝﨑　良典・徳田　英子 (2016). 幼児期の感情表出を促す文化的要因―短期縦断的観察研究による検討―　新見公立大学紀要, **37**, 15-21.

島　義弘・黒岩　佑 (2017). 幼児の向社会性の発達：実験室実験と自然観察による検討　鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, **26**, 43-54.

田中　浩司 (2005). 幼児の鬼ごっこ場面における仲間意識の発達　発達心理学研究, **16**, 2, 185－192.

田中舘　真美 (2020). ルール遊びから見えてきたこと　尚納総研論集, **2**, 83－88.

冨田　昌平 (2015). 鬼ごっこ・ルール遊びの展開における保育者の指導・援助－自由記述の分析をもとに－　三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, **35**, 19－26.

利根川　彰博・無藤　隆 (2011). 幼稚園の1クラスにおける4歳児の仲間関係進展の事例的検討：社会的能力と仲間関係の重なりとしての3つの発達ライン　乳幼児教育学研究, **20**, 1-11.

Treverthen, C., & Hubley, P. (1978). Secondary intersubjectivity: Confidence, confinding and acts of meaning in the first year. In A.Lock (Ed), *Action, gesture, and symbol*. New York: Accadmic Press, 183-229.

Wallon,H. (1952). *Les etapes de la sociabilite chez l'enfant*. Ecole liberee. reed.in Enfance pp.309-323.（ワロン,H.　浜田寿美男（訳）(1983). ワロン／身体・自我・社会　子どものうけとる世界と子どもの働きかける世界――　ミネルヴァ書房, 73-103.）

山本　登志哉 (1991). 幼児期における『占有の尊重』原則の形成とその機能－所有の固体発生をめぐって－　教育心理学研究, **39**, 122-132.

吉田　直子 (2010). “共同注意”の発達的変化　その2　－「自他関係」の組織化に関する考察－　中部大学現代教育学部紀要, **2**, 67-76.

【付　記】

本論文は，令和2・3・4年度科学研究費基盤研究（C）課題番号20K03352（研究代表者：藤田文）の補助を受けた。